

# 話しことばや文字ことばに親しむ子

— 読書・日記・作文の指導を通して —

吉田裕子

## 1. 対象児のプロフィール

生徒名 K・T (女) 昭和48年10月28日生(中学部1年)

本校小学部より入学し、現在に至る。ダウン症

(遠城寺式発達検査) 移移運動 4 : 8以上 手の運動 4 : 4

基本的習慣 4 : 8以上 対人関係 4 : 8以上

発語 4 : 4 言語理解 4 : 8以上

### (1) 一般的特性

- ・身辺処理面は確立しているが、几帳面すぎて場面の変化に対応しにくい。
- ・目的意識・期待感が持て、意欲的に物事に取り組もうとする。が、小柄で体力不足な面があり長続きせず、つまづいて自信を失うと立ち直りに暇がかかる。
- ・自分の思いをよく話すが、話に一貫性がなくつじつまが合わないことが多い。
- ・歌・リズムを好み、身体表現を得意とする。

### (2) 問題点と研究に取り上げた理由

家庭・学校の中で生活していく上では困らない程度の話し数は持っている。しかし、日常場面では、相手によくわかるように話したり、書いたりして、自分の意志を伝達することが十分にできず、理解してもらえなかったり、誤解される面が多いようである。この一端は、遠城寺式発達検査の言語理解に比べ、発語能力が低いことからもうかがえる。

そこで、本人が興味・関心を持ち、意欲的に取り組もうとする態度を崩さないようにしながら、相手にわかるように話したり、書いたりする力を育成する必要があると考えた。

## 2. 個人目標の設定と研究仮説

### (1) 個人目標の設定

話すこと・書くことに対する興味や関心はかなりあるので、この意欲的な部分を活用して、少しでも意志伝達がうまくできるように、「話しことばや文字ことばに親しむ」という個人目標を設定した。

### (2) 研究の仮説・取り組みの構想

K子の実態で、個人目標を達成する上での問題となったのは、次のような事柄であった。

- ・自分の思いをよく話すが、話に一貫性がなく、つじつまが合っていないことが多い。
- ・話し数はあるが、それらの適切な使用場面の理解に欠け、自分の好む言葉だけを使う。
- ・口の構造(ダウン症児の特徴で舌が弛緩している)にも関係するが、早口でわかりにくい。
- ・文章を書くと、最初は文として成り立ったものを書いているが、途中からは、同じことを繰り返

していたり、単なる文字の羅列になってしまっている。

以上の事柄を改善させていくために、K子が好む、読み聞かせなどを組み込みながら、三本の柱を立てて指導していくことにした。三本の柱とは、以下に示すものである。

- ① 本の読み聞かせ————→適切な言葉の使用場面をつかませる手だて。
- ② 日記指導————→文章を書く楽しみを養わせる手だて。
- ③ 絵に話をつける————→相手にわかるように話したり書いたりする力を養わせるための手だて。

### 3. 指導実践例・対象児の変容

指導にあたっては、できるだけ押しつけにならないようにし、K子が意欲的に取り組もうとしたものを取り上げていった。また、話をさせる場合には、ゆっくり、相手によくわかるようにという点に留意させた。

#### (1) 本の読み聞かせ

4月・5月————→20ページ前後の絵本、2冊を交互に読み聞かせた。

○ 目あて————→「～です」「～ます」「～でした」の使い方に親しむようにさせる。。

○ 変容————→言葉の使用場面に気づかせようと、文末表現の違う所では読むテンポをゆっくりにしたり、強調したりしたが、関心や注目をさせることは難しかった。本を読んでもらえるのがうれしただけにとどまっていた。実際に書いたり、話したりする場へのつながりがほとんどみられなかった。

6月・7月————→国語の教科書の物語「つるのおんがえし」を読みきかせした。

○ 目あて————→4月・5月の目あてを含め、少しでも詳しく話をしたり、様子がよくわかるように書いたり話したりする。

○ 変容————→自分から読んで欲しい本を持って来るようになった。読んでもらった後はもう一度自分でも読んでいた。

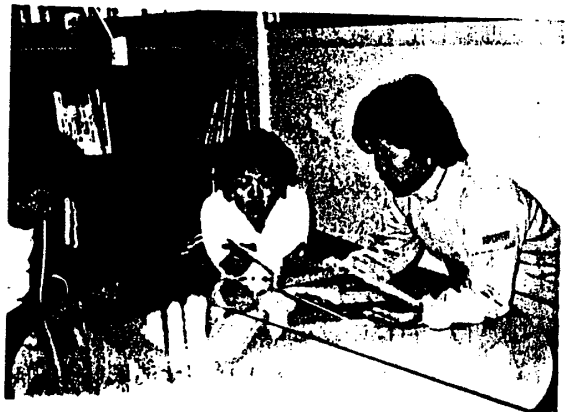
しかし、文字の通りでなく自分の読みやすいように変えて読んでいた。文末表現の実際場面での活用は、やはりあまりできていない。が、6月下旬頃から文章を書くとき「とても」「うまく」

「よく」「つよく」を使って、様子を少し詳しく書くようになってきた。

9月・10月————→これまでに読みきかせたものをくり返し読み聞かせた。

○ 目あて————→少しでも詳しく話をしたり、様子がよくわかるように書いたり話したりする。

○ 変容————→「とても」「うまく」「よく」「つよく」がよく使えるようになったとほめたので、これらの言葉をどこであるかが手あたり次第使うようになってしまった。言いなおし、書きなおしをさせると最初は素直にしているが、長続きせずいやがり、また自分の好きなように話したり書いたりしてしまう。しかし、話したり書いたりすることの興味



・関心は、以前よりも増してきているように思われる。

## (2) 日記指導

ここでの日記指導は、主に、生活ノートに毎日「帰りの会」後に記入する一行作文にポイントを置くことにした。一行作文は「学校で一番楽しかったこと」を記入するものである。記入した後にそれを読ませることにした。

### ○ K子の書いた一行作文

4月10日 — 「ダンスおどりました。さきことわたしといっしょにおどりました。またま  
しょう」

5月8日 — 「ひふくをしたこと」

6月4日 — 「マラソンをしたこと」

7月22日 — 「テニスのしかなかったこと」

### ○ 変容

4月当初は、一行といっても指示を入れずK子の好きに書かせていた。が、クラスの友達から少しでいいと言われたため、5月以降は簡単に書くようになってしまった。そこで、読ませた後にどうして楽しかったか話すようにさせた。5月頃は、理由がほとんど言えず、「針と糸で縫った」など自分の行動や様子を話そうとした。どうして楽しかったかと言ってもこのような状態なので、教師サイドから「ししゅうができて楽しかったの？」など、具体的に誘導してみた。すると、「みんなと一緒に走っておもしろかった」「きれいに縫えた」など、理由や内容を話すことができるようになった。しかし、長く話していると、全く違うことを言いだしたりする。

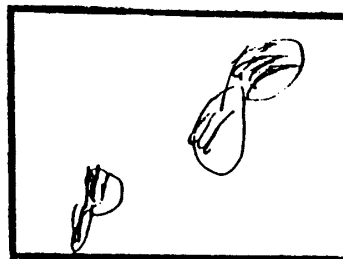
## (3) 絵に話をつける。

4月段階では、一コマ漫画的な絵カードを見せ、その絵について話作りをさせようと試みた。が、「わからん」の連発であったり、カードに描いてある動物を「うさぎ」「いぬ」と言うのみで話につなげることができなかった。そこで、あさがおの観察をはじめたのをきっかけに、K子自身に絵を描かせその絵の説明を書いたり話させたりすることにした。

### ○ K子の描いた絵と説明(例示)

6月3日(火)

「あさがおのたねをまきました。わたしたちはめをててきました。あしたはあさがおにさ  
きます」



あさがおの  
双葉の絵

### ○ 変容

他の人が描いた絵を見て、それがどんな絵なのか話をするのには、楽しみや興味が持てず、絵に合ったお話作りをすることができなかった。ところが、自分が描いた絵だと、絵の説明を進んでしてくれたので、話をさせてから、それを文章に書かせるように指導した。一行文であれば、ほぼ話したりに書いていた。しかし、話が長くなると、最初は良いのだが後になるにつれて、何を書いているのかわからない状態になる。そこで、書いている内容が、横にそれている場合、側

で「さっきはこんな話だった」と言って書かせることにした。が、この指導をしていると、書かされているという気持ちになるようで、書こうとする意欲を失わせてしまうことになった。6月のあさがおの観察では、思ったことも書いているが、7月に書かせたものでは、「はがでました。」としか書かなかったことからこのことがうかがえる。

一学期は、あさがおの観察を中心にしたが、二学期になると、行事が多くその行事の後に絵を描く機会があったので、クレヨン・絵の具で十分絵を描き込んでからその絵の説明をするようにさせた。あさがおの観察では、スケッチ程度の絵だったため話が広がらなかった。しかし、絵を描き込ませると、描いているうちに思いが広がり、後で話をさせてもかなり詳しく様々な事を話したり書いたりした。

徐々に、長文であっても何が書いてあるのかわかるようになってきた。が、現段階では長くなればなる程、同じ事の繰り返しであったり、単なる文字の羅列になってしまいがちである。

#### 4. 考察と反省

K子が、自分の意志を少しでも相手にうまく伝達できるようになることを目指して、研究と取り組んできた。話しことばや文字ことばに親しむ態度は、多少とも養われつつあるように思う。

しかし、どちらかという文字ことばが主になり、書くことにかかなり偏り過ぎたようである。文字を書く前に、言葉がきちんと相手に伝わるように話ができるようになる事が、K子にとって最も必要であると感じた。また、K子の興味・関心の点からみると、手紙を書くことを好み、自ら、休んだ友達や先生たちに進んで手紙を出していたので、もっと、この面に注意して指導していれば効果があったのではないかと思われる。

また、話をさせると、どうしても早口になり、言っている事が理解できない場合が多いので、相手にわかるように話させる事を根気強く続ける必要があると考える。

#### 5. 今後の課題

ことばの指導は、話すこと、聞くことが何より先行する指導である。今回の実践では、書くことも並行して行ったが、もう少し話すことにポイントを置いた指導がK子には必要であることを痛感している。ゆっくり話す手段をさらに工夫し、興味の発生・意欲の持続のためには、絵本・童話・昔話を導入し、その上で、口の体操や、音指導など養・訓的配慮を十分心掛けていかねばならないと考える。もうひとつは、保護者との連携の強化ということである。K子は、事例で述べたように学習取り組みが意欲的である。これは、家庭における保護者の協力が大きな力になっている。生活ノートを中心に家庭との連携を密にし、学校と家庭の指導が常に一致するよう努めている。この点については、別添資料を参照されたい。